

## できること・分かることは

初任時は、現在のような初任者指導の制度はなく、校内の諸資料、引き継いだ学級経営案や先輩の意見等を参考に、暗中模索の状態です。学級経営をしていました。

当然、赴任早々から、うまくいくわけがありません。大学時代の教育実習は、短期間であってもそれなりに有意義だったと思っていましたが、現実には全く違っていました。特に、授業では、「ねらい」「教材分析」「実態」「個々への対応」等々、事前に考慮しなければならないことが多くあるのに、ただ授業をこなすだけで、意欲旺盛な子供たちには申し訳ない気持ちでいっぱいでした。そこで、これまでの漠然とした教育観を反省し、何か一つだけでもしっかりと指導法・理論を習得しなければと模索していました。

1学期も半ば、そんな現状を見かねたのでしょうか。指導主事から校長になったばかりの新任校長さんから、「できるってどんなこと?」「分かるってどんなこと?」という質問を受けました。

問われたことがよく分からず返答に窮していると、運動場で走り高跳びに興じていた子供の動きを見つけ、上手に跳べる子供は、何ができているのか、成功するポイントは何なのかを一緒に考えようということになりました。助走の速さ・距離、踏切の位置、手の動き、体や顔の向き等々、予想できるポイントについて、稚拙なことも含め具体的・多面的に細かく観察する作業でした。それは、自分の体験からのみ考えがちであった指導法から、子供たちの動きの分析を基に、きめ細かい指導法に視点を変えるきっかけでした。今、考えれば、当然の作業ですが、基礎的・基本的なことを丁寧に指摘していただくとともに、行動分析の大切さを認識していく大事な機会でした。さらに、この考え方は全教科に共通しますが、まずは、体育のように動きの見える教科で勉強すれば、分かりやすいといった助言もいただきました。

きめ細かい観察・分析は、「教科のねらい」「活動の組立て」「評価」「個々への対応」等と有機的に関連していて、活用方法は、自身の地道な実践の積み重ねによってのみ得られるのかもしれませんが。実際は、実践すればするほど興味深い研修でした。